
辿り着きたい場所

めいりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

辿り着きたい場所

【Nコード】

N4758J

【作者名】

めいりん

【あらすじ】

当ても無く一人で旅をしている女性レイル。ある日金を稼ぐため辿り着いた街で、赤毛の少年と出会い、ひょんなことから少年が働く薬屋で住み込みで働くことになった。

薬屋で働きながら、色んな人との関わりの中で、レイルが自分の中で答えを見つけていくお話。

私は一人で生きてきた。

必要とする者もないし、必要とされることもない。

それでも歩き続けているのは何故なのだろう。

争いの絶えない小さな村の孤児院で育ち、13の時に村を出た。
以来ずっと、当てもなく旅をしてきた。

街が見えてきた。所持金も尽きてきたことだし、そろそろまた稼ぎ
所を探さねばならない。

ロトリネというらしい街に入ると、噴水のある広場に出た。
道も、周りの家々もレンガで造られていて風情がある。

噴水の周りを走り回る子供たち、楽器の演奏をする一団、色とりど
りの露店。

賑やかな街だ。

ここならすぐに職も見つかるだろう。

噴水の近く、広場の中央にある掲示板の前に立った。

だてに12年旅してきたわけではない。慣れている旅の護衛の仕事
でも探すか…。

「姉ちゃん、その袋つてもしかして薬草!？」

不意に背後から声をかけられた。

振り向くと、10才位の赤毛の少年がニカツと歯を見せて笑ってい

た。

「ああ… そうだが」

そういえば、道を歩いていて、何となく摘んだ薬草を、袋に入れて腰につけている。

子供のころ、薬が買えずに薬草を集めていたクセが残っているようだ。

「その袋からはみ出てる葉っぱってロズリーだろ？」

すり潰したのを傷に塗ればすぐ治るんだよな！」

赤毛の少年は得意げにそう語る。

「詳しいんだな。じゃあこれは知っているか。」

私はあらかじめ、ロズリーを元にして作っておいた玉をその場に投げ落とした。

ボン！と爆発する音がして、自分と少年とを包む白い煙がもくもくと広がった。

「けほっけほっ。何だ今の！？」

煙の途切れ目から、少年の真ん丸にした目が見えた。

「薬草に魔草を合わせるとこうなった。

光草という魔草を使えば、けむり玉の代わりに光線を出すものも作れる。

旅の途中で野生の動物に会った時など役に立つな。」

「へえーっ。姉ちゃんって旅の人なんだあ！すごいなー！」

少年は胸の前に出した両手を握り締めて、目をキラキラと輝かせている。

「ねえ、姉ちゃん、ロトリネで職を探してるんだったら、オレが働いてる薬屋に来てよ！」

センサーに頼んだら働かせてくれるかもー!!」

「それは有難いが、薬草についての知識なんて、ほんの少ししか持っていないぞ？大丈夫なのか？」

「でもでも、さっきのけむり玉の作り方とかオレ知らなかったし！センサーもきつと知らないよ！」

それに姉ちゃん美人だから、お客さんも絶対増えるって！」

ほら、行こ行こー！少年は私の腕を掴み、強引に引っ張って行く。

何がなんだかわからぬまま、こうして私は、少年の働く薬屋へ行くことになった。

「ガッシュセンサーー!!ここで働きたいって人連れてきましたー！」

「あ？」遠くの方で、小さな声が聞こえた。

「旅の人ですー！」

古ぼけた小さな店内。店中いっぱいの種類別に分けられた薬草がずらりと棚に並べられている。

カウンターの奥から、がたいのいい年配の男性が出てきた。

「うちはお前で足りてるんだがなあ。薬草のことわかるのか？」

ぶつぶつと呟きながら、顔を上げて私を見た。

「…。」

固まっている。

「ねっ！ 美人でしょ！！ それにこの姉ちゃん凄いですよ！ こんなん作れるんですよ！」

少年は、けむり玉を指し出して見せ、床に投げ捨てた。
店内に白い煙が充満する。

「もし、良かったら、この街にいる間働かせてほしい。
薬草に関しては深い知識はないが、少しなら扱える。
働かせてもらうからには、頑張って勉強するつもりだ。」

私は見えない相手に向かって頼んだ。
げげげと咳をする声が聞こえる。

「なるほど、調合は出来るようだな…。こんなもん作れる位だから、扱いには慣れてるんだろう。」

「…ロトリネにいる間ここで働きな。」

センサーと呼ばれる男性はそっけなく言った。

「やったーっ!!」

煙が消えかかり、少年の顔が輝いているのが見えた。

「恩に着る」

「そついや、名前をまだ聞いてなかったな、お嬢さん。」

「そついえばオレも!」

と少年が言つと、

「お前は名前も聞かずに連れてきたのか!」

ゴツンと少年の頭をグーで小突いた。

「レイルだ。これからよろしく頼む。」

「俺は、この店の店長のガツシュ。そしてこいつはここで働いてる…」

「コバルト! ガツシュセンサーの弟子として調合師目指して頑張つてんだ!」

「いつ弟子になったんだ…」とコバルトに向かってガツシュが呟く。

「今日は休みなんだな。向うに本を置いてる部屋があるから、コバルトと一緒に勉強してくれ。コバルト! ちゃんと教えてやる

んだぞ！」

そう言い残して、ガツシュはカウンターの奥の部屋へと消えた。

「そついや泊まる場所は決めてるのか？」

奥の扉が少し開いて、ガツシュの声が聞こえた。

「いや、まだ決めてない。」

「だったら、働いている間はうちに泊まるといい。お前さんが良かったらの話だが。」

私はガツシュに礼を言い、ここに住み込みで働かせてもらうことになった。

「良かったな〜！センサー姉ちゃん見てしばらくぽかーんとしてた！旅人と聞いて来てみりゃブロンドの美人さんだもんな〜。そりゃぽかーんとなるわ。」

「コバルトと言ったか。ありがとう。おかげで仕事だけじゃなく泊まる場所まで見つかった。」

「いやいや、オレだって姉ちゃんに旅のこととか色々教えてもらいたいしさ」

コバルトは照れ臭そうに笑った。

「さあ、早速あっちの部屋で勉強しようぜ！」

コバルトに連れられて、カウンターの横にある、本棚のある部屋に入った。

「おれは、ここに来てからまず薬草の種類を覚えることから始めたかな。」

コバルトはそう言いながら、踏み台を使い本棚から何冊か本を取り出す。

それから本棚の側に置いてある四角いテーブルに座ったので、私もコバルトに向かい合う形で座った。

「これがいいと思う。」

と薬草の図鑑らしい本をテーブルに差し出した。

「調合の基礎も大事だけど、姉ちゃんはそれわかってるみたいだし……。」

図鑑を開くと、旅の途中で見たり摘んだりしたところのある草がたくさん載っていた。

「この紫色の小さな草はよく見るが、名前は知らなかった。」

効果からして痛み止めて呼んでたが、プリムって言う名なんだな……。」

「へえーっ。名前も知らないのに何に使うかはわかるんだな！　すげえや！」

姉ちゃんも調合師になりたいの？」

「いや。そういうわけじゃないんだが、生まれた村が貧しくて薬なんか無かったからな、人に教わったり、調合が上手い人の見よう見まねで自分で薬を作っていたんだ。」

「12年前 私の住んでいた村では紛争が絶えず、多くの人がかくらない戦いに巻き込まれ死んだ。せつかく生き残ったと思ったら、今度は村特有の病が流行り、また数十人亡くなった。」

薬草に詳しい人の家に行き、集まった皆で薬草を調合して薬を作ったが、症状の軽いものにしか効き目がなく、薬が出来た頃には重症者がほとんどで、そういう人々には全く効果が無かった。

「ここで勉強して知識をつければ、あの病気を治す薬を作れるようになるのだろうか…」

いけない、ちょっと昔のことを考えすぎた。我に返ると、キョトンとコバルトがこちらを見ている。

「あ、すまない。コバルトは調合師になりたいんだったな。」

「うん！オレも実は出身はロトリネじゃなくって、この国の東の港町なんだけど、

母ちゃんが体弱くてさ。だからここで頑張って勉強して、調合師になって

母ちゃんを元気にする薬作るんだ！」

コバルトは目をキラキラさせながら、晴れやかに言った。

「そうか。こんな親思いのしっかりした子を持ってコバルトの親も

誇らしいだろうな。私もコバルトを見習って頑張らないといけないな。」

「そんなに偉くないって〜！」

コバルトは困ったようにはにかんだ。

それから陽が落ちるまで、コバルトの話を聞いたり、けむり玉や光り玉などの作り方を教えたり、薬草の名前を覚えたりした。

「夕食だぞ！」とガツシュの呼ぶ声がしたので、私とコバルトは本を元の場所に戻し、カウンターの奥のキッチンへと向かった。

テーブルに並べられたのは野菜や野草を使った質素な料理が主だったが、

料理の中心には骨付き肉がある。種類が色々あって豪華だと思った。

「これ、ガツシュが全部作ったのか!？」

「ああ、嫁さんが死んじまったからな。自分でやらねえとしようがねえだろ。」

ガツシュは皿を並べながら、吐き捨てるように呟く。

「わぁーっ！肉がある！今日はレイル姉ちゃんが来たからご馳走だー！」

コバルトはひたすら感動している。

「まあ短期間とはいえ、コバルトといい新入りは滅多に入らないからな。少し奮発した。」

ガツシユは照れ臭いのか、私に目を合少わせずそう言った。

まだ会ったばかりだというのに、親切にしてくれるこの2人に心から感謝した。

ガツシユは無愛想にしているが、とても優しい人だと思った。

コバルトが慕う理由もわかる。

明日からの食事の準備には、自分も手伝わせてくれ、と頼むと、ガツシユはほんの少し口の端を上げ

「おう、頼む」と返事をした。

明るく暖かい部屋で、誰かと一緒に食事をするなんて何年ぶりだろうか。

相変わらずコバルトはベラベラと喋りまくるし、ガツシユは無口で気難しい顔をしている。

しょうがないので、私がコバルトの相手をした。

違和感が無いといえば嘘になるが、こういう食事も悪くないと思った。

風呂に入った後、2人に案内され、キッチンの横の階段を上って私用の部屋を案内された。

「部屋って言っても、コバルトの部屋を衝立で仕切ってるだけなんだがな。すまんが他に部屋がないので我慢してくれ。」

「いや、構わない。それよりすまない、コバルトの部屋を狭くしてしまつて。」

するとさかさずガツシュが口を挟んだ。

「こいつなら大丈夫だ。まだチビだし、広くて勿体無い位だったんだ。」

「別に姉ちゃんが横に来るのはいいんだけどさあ、センサーその言い方はヒドインじゃないすか!？」

そう言ってふくれ面をしていたコバルトだったが、顔がきつくなつたのか、笑い出した。

それを見てガツシュも笑った。

私もつられて少し笑ってしまったらしい、コバルトに「笑った方が可愛いから、もっと笑ったほうがいい」とアドバイスされた。

ガツシュもうなずきながら、それだったらお客も喜ぶと言われて恥ずかしくなり、

私はそそくさと自分の部屋に逃げ込み、ベッドに入った。

明日は来客の対応を任されている。2人にしてもらった親切を裏切らないように頑張ろうと誓い、眠りについた。

次の日、店専用の黒いエプロンと、同じく黒の平べったい帽子を被りカウンターに立った。

とりあえず客が来たら、薬草が欲しいのか、調合した薬が欲しいのかを聞き、

調合が必要だったら奥にいるガツシュに伝え、薬草は薬草保管庫や店の棚に置いてあるものをコバルトに

取り出してもらおうようにと教えられた。

カウンターに置いてある、ロズリーやプリムといった身近に扱える薬草は、私が取り出して渡していいことになった。

今日の来客は20名程だったが、半数がカウンターに置いてある薬草が目当ての客だった。

カウンターに置いてある薬草だけでも、名前と実物がなかなか頭の中ですぐに結びつかず戸惑ったが

一覧表を見ながらなんとか対応した。

コバルトは始終、保管庫とカウンターをくるくると行ったり来たりし、ガツシュに調合を頼むとすぐに、そして的確に薬草の調合をした。

初日の仕事が終わりに、自分の部屋で薬草の本を読みながら、早く薬草の種類を覚えて、2人に迷惑をかけぬよう頑張ろうと思った。

2日目、朝から見覚えのある客がやって来た。確か昨日来た客だ。昨日に引き続き、傷薬のロズリーを買っていった。

しばらくして、また見覚えのある客がやって来て、軽い痛み止めのプリムという薬草を買っていった。

「あれー！？トムじゃん。昨日薬買い忘れたの？」

客に気付いたコバルトが聞いた。

「ああ…まあな。それじゃ。」と男性は急ぎ目に出て行った。

「ふーんなるほどな…。」

3日目、カウンターの仕事も初日に比べたら大分マシになってきたように思う。

初日から来てくれている、コバルトがトムと呼んでいた男と、もう一人のプリムを買った男は今日も来た。こっちはチエルという名前らしい。

「君みたいな人に薬を渡してもらえて幸せだ。また明日も遊びに来るよ。」

と言って店を出た。よほど私が珍しいのだろうかとかコバルトに聞くと

「ファンなんだよ」と言った。

4日目、5日目、6日目…

働き始めて2週間が経った。日が経つにつれ知っている顔が増えていく。

トム、チエルは相変わらず毎日顔を見せるし、その他にもおばあさんや主婦の方も常連のようで

体に良い薬草のドリンクなどをよく買いにくる。

初日に比べて客が増えたような気がするが 気のせいだろうか。

働き始めて3週間目のこと、常連のおばあさんが店に来た。

「こんにちは。レイルさん、元気かい？」

と尋ねてきたので、「私は変わりありません」と答えた。

代わりにおばあさんの調子を聞いたところ、おばあさんは優しく微笑み

「レイルさんやコバルトが一生懸命ここで働いているのを見ると元気になるよ。だから元気じゃ、ありがとう。」

と言った。

なんだかとても顔が熱くなって、赤くなっているのが自分でわかった。

この街の人たちはいい人ばかりだ。

ずっと1人で旅してきたから、身にしみて優しさを感じる。

「こ、こちらこそ、いつもありがとうございます。今日はどうされたでしょう。」

慌てて話したので囁んでしまった。

「実は羽草が欲しくてのう。ここなら売ってるんじゃないかと思って。」

「羽草…ですか」

コバルトに薦められた図鑑にはこういう草の名前は載ってなかった。とりあえず棚の整理をしているコバルトに羽草のことを伝えようと、薬草保管庫まで取りに行ってくれた。

そして、茎は緑、羽のような形をした白い葉を付けた草をコバルトから受け取り、おばあさんに渡した。

羽ペンのようなその草を渡すと、おばあさんは満面の笑みで「ありがとう」と言って店を出た。

「羽草って、図鑑に載ってなかったように思うんだが。」

コバルトに尋ねてみる。

「うーん、薬草と魔草の間みたいな感じだからなー。どっちでもないっていう人もいるし。」

置いてない店も結構あるんだよ」

「どという効き目があるんだ？」

「羽草はお守り用の草なんだ。」

古くから、神の病を治したという伝説があつて、奇跡の草と呼ばれてる。

羽草を調合して重い病気が治ったっていう人は何人か聞いたことがあるけど、

薬草じゃないし、多分気持ちの問題だと思う。」

不思議な草だな、と思った。

後日、おばあさんが来て、羽草で作ったブレスレットを、事故で5日間意識のなかった息子につけてあげたら目を覚ましたと報告に来た。

コバルトにその話を伝えると、

「飲ませるとかならともかく、腕につけるだけで効くとは思えねーな。でも良かった！」

と笑っていた。

カウンターの仕事が大分出来るようになってきたので、コバルトと

私が交代で、ガツシュの調合の手伝いをするようになった。

「もう！！オレがカウンターにいと、トムやチェルがすっげーが
っかりした顔するんだぜ！」

夕食のテーブルで、コバルトが不満そうに語る。

「そりゃあ、あいつらにとってはガキより、レイルの方が嬉しいだ
ろう」

コバルトの不満を聞き、ガツシュは笑っている。

「子供が嫌いなのだろうか」と私が聞くと、2人とも吹き出した。

「全くこれだからな、でもオレも姉ちゃんのそんなところ好きだ
けどね！」

でも、やっぱすげえよ。」

コバルトがしみじみと言い出すので、「何が？」と聞いてしまった。

「オレが1年かかって先生のお手伝いできるようになったのに、姉
ちゃんは1ヶ月だぜ！？」

「レイルは元から薬草の調合に慣れてたからな…。しかし、私も調
合師になる素質は充分にあると思っている。」

ガツシュも真面目に言い出し、2人に揃って褒められ、いたたまれ
なくなった私は夕食を早めに済ませた。

自分の部屋に行こうと階段を上ろうとすると、「姉ちゃんならもし
かしたら…」といったコバルトの呟きが聞こえた。

それから2日後の夜、月明かりの下、ベッドの上で私はこれからのことについて考えた。

旅立つには十分な金が稼げた。

しかし最近では、金を稼ぐことよりも、ここで働くことが大事になってきている気がする。

ガツシユやコバルトと過ごす毎日はとても楽しいし、街の人はみんな暖かい。

私がこんな思いをしていいのだろうかという気がする。

いつまでもここに世話になる訳にはいかない。

今週中には、ロトリネを旅立とう。

私にはやっぱり一人で旅する生活の方が合っている。

考えているその時に、隣から、「ぐすつくすつ」と小さく嗚咽する声が聞こえて驚いた。

すぐにでも傍に行きたかったが、必死に抑えているようだったので、そのまま動くことができなかった。

翌日の朝、朝食の時のコバルトの様子はいつもと変わらないので安心した。

しかし、昨日の様子が衝撃的で、頭から離れない。

「何か、コバルトにあったのか？昨日の夜に泣いているような声が聞こえた。」

コバルトがキッチンを出て行った後、黙って洗い物をしていたが、耐えかねて、テーブルを拭いているガツシユに尋ねた。

「ああ。昨日コバルトの家から手紙が届いてな。

コバルトに渡した後にくらく暗い顔してるからどうしたのかと思って、聞いちゃったんだが…

つい最近のことだが、体の弱い母親が原因不明の病気にかかったそうなんだ。

それもはじめて聞く病気だな…。薬を作ってやりたいが作りようがねえんだよ。」

ガッシュは落ち込んでいた。

「どんな病気なんだ？」

「体が赤色に変色していくらしい。ゆっくりと変色が広がっていくそうだが、それが全体に広がったら死ぬそうだ。」

「まさか」

耳を疑った。その症状は、自分が生まれた村で流行った病気と全く同じだ。

「その病気… 症状に覚えがある。」

「何だつて!？」

ガッシュは驚いて目と口を大きく開いた。

私は、自分の生まれた村で流行った病のことをガッシュに説明した。

「私や調合のできる村の人で、薬を作ろうとしたが、軽症にしか効かなかった。

だが、コバルトの母親はまだかかったばかりなんだろう？それなら

きつとこれで治まる。」

「まあそうだが…10年以上昔のことなんだろう？調合の仕方は覚えてるのか？」

ガツシュは腕を組み、難しい顔をしている。

「絶対に思い出してみせる。それに3人で力を合わせればきつと作れる。」

この病に倒れた人々を間近で見てきたのに、何も役に立てなかったら自分が許せない。」

ガツシュは黙って頷いていた。

「そうか…。何だかお前さん、変わった気がするよ。まあいい。少しでも思い出せたら、俺に教えてくれ。」

そう言って右手をあげ、キッチンを出て行った。

その日の夜、私は部屋でペンを握り、12年前のあの薬の作り方を必死に思い出していた。

「ブリスウの汁を1滴… センツキ… トワ…」

机の上に置いた紙に、思い出したことをメモしていく。

当時名前は知らなかったものの、思い出そうとすると、使った薬草の種類が意外と頭に浮かんでくる。どうしても助けたい、とあの時と同じく思った。その執念のおかげかもしれない。

次の日の休みは、いつものようにコバルトと本棚の部屋で勉強して

いた。

「コバルト、すまない。ガツシュからお前の母親の事を聞いてしまった。」

私が声を低くしそう切り出すと、

「そう。別に謝ることじゃないだろ！」

コバルトはいつもと変わらぬ調子で答えた。

「その病気なんだが、実は生まれた村で流行った病なんだ。その時完全ではないが薬を作った。必ず作り方を思い出してみせる。ガツシュも協力してくれると言った。みんなで考えればこの時より良い薬が作れると思う。」

コバルトは、本を読むため俯いていた顔を上げ、目を丸くして、私の言葉を聞いていた。

「姉ちゃん……！」

笑顔が崩れ、半泣きになっていた。

その次の夜には、カウンターの奥の調合室でガツシュと協力し、ほぼ当時の薬を再現出来ていた。

一緒にいたコバルトも笑顔を絶やさず嬉しそうだった。

次の日、店の仕事が終わりに、調合室で最終段階の調合を行おうとした時、

玄関のドアがノックされた。

「コバルト宛に電報だ」

ガツシュから受け取った電報を読むコバルトの顔が青ざめている。
嫌な予感がする。気が気じゃなくなり、持っていた薬草を落として
うになった。

心臓の鼓動が速くなる。

「母ちゃんが… 変色が体の半分まで進んでるって。でも、大丈夫
だよ。皆で作った薬があるもん…！」

「…！」

私は目を閉じ、最後に調合しようと手に持っていた、羽草の束を胸
に当て、握りしめた。

「コバルト。羽草の奇跡は気持ちの問題だって言ったよな。」

私はコバルトの目線の高さに合うように屈んだ。

「やれることはやったんだ。あと私達に出来るのは信じることしか
ない。

可能性が増えるなら、全部やろう。信じるんだ！」

私は、束の中の1本を差し出した。

コバルトは、渡された羽草をみつめ、それから私の顔を見上げた。

「そうだよな！みんなの気持ちを込めれば、絶対母ちゃんは良くな
る！」

オレも信じるよ…。センサーもだよ！」

「勿論だ！」

こうして、みんなの祈りを込めた薬は出来上がった。

「きっと良くなる」

ガツシユは、微笑み、大きな手でコバルトの肩をぽんと叩いた。

数日後、店の営業中にコバルトの実家から手紙が届けられた。

「わーっ、母ちゃん、薬が届いてからあれ以上酷くなっていって！
このままの状態が続けば、もしかしたらもしかして良くなるかもっ
てお医者さんが言ったらしいぜ！」

それを聞いて、私もガツシユもホッとした。

コバルトは仕事中的ということを忘れて、嬉しさを抑えきれずに飛び跳ねていた。

羽草は本当に奇跡の草なのかもしれない。

同時に、これで自分の中での区切りがついた。

別れの挨拶は苦手だ。置手紙をして夜中に出て行く。

隣からコバルトの寝息が聞こえる。

玄関は鍵がかかっているから、窓からこっそり抜け出すことにした。

しずまり返ったロトリネの広場を抜けると、広い一本道に出て、思わず立ち止まってしまう

街とはまるで正反対。何も無い。あるのは澄んだ空気。広がるのは星空と、月明かりに照らされる草原だけ。ひんやりとした風が心地良い。

「この感じ、懐かしいな……」

独りで歩く。やっぱり私にはそんな生き方が合っている。

そう思っただけ歩き出した時、後ろの方から声が聞こえた。

「姉ちゃん!!」

「コバルト!？」

どうして……せっかく決心がついたのに。

コバルトは駆け出し、私の目の前までやって来た。

「これ、見たよ。旅に出ちゃうの？」

コバルトは私が書いた手紙を握り締め、今にも泣きそうな顔している。

「はああ。待て、コバルト!」

ガツシユがコバルトの後を追いかけてきた。

私は2人に顔を合わせないように反対側を向いた。

「こっそり抜け出すつもりが、気付かれましたか。」

そうだ。私は旅の途中だ。これ以上世話になるわけにはいかないか

らな。」

「何か違和感がして起きちゃったんだ。そして窓を見たら外歩いている姉ちゃんが見えて…。」

振り向いてはいけない。しかし歩かなければ…と思うのに足が動かない。

「どうしても行っちゃうの？もつとたくさん一緒にいたい！！」

背後から聞こえるコバルトの声が突き刺さるようだ。

「すまない。コバルトとガツシュには良くしてもらって、本当に感謝している。」

ここで過ごした一ヶ月半はとても楽しかった。
でも、やっぱり私は1人で旅するほうが落ち着くんだ。」

「オレもガツシュセンサーも、姉ちゃんがないとダメだよ…」

消え行きそうな声でコバルトが言う。

「やめるコバルト。この先どうするかは本人の自由だ。だが、コバルトの言ってることも本当だ。」

俺もコバルトも、街のみんなもお前を必要としてる。気が向いた時にでも、いつでも帰って来な。

みんなレイルの帰りを待つてる。」

ガツシュの声を聞いて、胸が詰まった。

思えば、私は何のために旅をしているのだろう。

誰も必要としないから。必要とされることもないから。

ふと、コバルトの笑顔、ガツシュの優しさ、街の人たちの喜ぶ姿が浮かんだ。

必要としてくれる人たち…。

思い出すと、涙が止まらない。

長く独りで歩いてきて、求めていたもの。

とつくにわかつていたはずなのに。
認めたくなかった。

だけど、今、はっきりと気付いた。

「私はここにいてもいいのかな…」

声になってるのかよくわからなかった。

「あつたりまえだろー！」といって、背後からコバルトが勢いよく抱きついてきた。

後ろを振り返ると、月に照らされたガツシュの顔が、優しく微笑んでいたように見えた。

私が辿り着きたかった場所、それがやっとわかった。

これからも、大好きな2人と一緒にいられる。
そう思うと、今まで感じたことのない暖かさで胸がいっぱいになっ

た。

「全く寒くてしょうがねえ！とつとと帰るぞ！」

そう言いながらも、ガツシユの顔は晴れ晴れとしていた。

コバルトも、私もきつとそんな顔をしてると思う。

こうして、私達3人は、いつも過ごしている小さな薬屋へと帰った。

（後書き）

こんにちは、短編なのに長いです^^；
短期間で書いたので、ちゃんとした文章になってるかちょっと不安です。

これから、ちょこちょこ修正していけたらなと思います。
楽しんでいただけたら幸いです。お気軽に感想下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4758j/>

辿り着きたい場所

2011年1月27日04時53分発行